

A. マーシャルの労働市場論

吉 武 清 彦

1. は し が き

最近「社会政策論の再構成」という声が聞かれ、従来の社会政策論に対して反省が加えられつつある。このような新しい動きのなかで注目すべきは、東大の隅谷三喜男教授の「賃労働の理論」であろう。隅谷教授の理論内容は昭和40年出版された『労働経済論』の中に詳細に展開されているが、そこで同教授は、従来の日本の社会政策論では労働市場の分析があまりなされていなかったことを指摘し、労働市場論研究の重要性を力説しておられる⁽¹⁾。そして労働市場論研究の学説史的な考察を行ない、古典派、新古典派、マルクス経済学及び労働経済学においてそれぞれ労働市場がどう理解されていたかが要領よく簡潔に叙説せられている⁽²⁾。

A. マーシャルに就いては同教授は次の如く述べておる。『彼（ルヨ・ブレンターノ——筆者注）はさらに労働者の基本的特質として、労働の販売者は自己の労働力以外に売べきものを所有していないという事情をあげ、この二点から《労働》の特殊性を展開した。このような問題の捉え方はマーシャルに影響し、マーシャルを通じて近代経済学に影響すると共に、歴史学派を通じてアメリカ制度学派に影響を与え、労働経済学の一構成要素となったのである⁽³⁾。』すなわちマーシャルは、今日の労働経済学的なアプローチのいわば源泉をなすものであって、極めて重要な地位を占めるものであり、隅谷教

(1) 隅谷三喜男『労働経済論』（日本評論社、昭和40年）57頁。

(2) 上掲書。9頁より34頁。

(3) 上掲書。10頁より11頁。

授自身もマーシャルから強い影響をうけたことは、『労働経済論』を読んだ限りでは否定し得ないように思われる。

しかしながら同教授の『労働経済論』では、A. マーシャルの理論構造は充分詳細に敘述されておるとはいえない。生産要素としての労働力が他の生産要素と異っておる点に関する A. マーシャルの見解を、『経済学原理』第6篇「国民所得の分配」の第4章「労働収入」によりながら、述べておるに留まる。従って、隅谷教授の『労働経済論』を読んだ限りでは、マーシャルの立場を全面的に捕捉し得ないうらみがあるといえよう。

いうまでもなくマーシャルは、労働を単に一生産要素としてのみ考える抽象的な思弁の段階に留まっていた訳では決してなかった。抽象的法則の発見や分析用具の造出に専念する理論家たるに留まらず、マーシャルは19世紀後半のイギリス資本主義の現実については広大鋭利な理解を持っていたのである。従って労働力商品の特殊性の理解についても、彼には、それを裏付けるような該博な事実を知っていた。このことはマーシャルの主著たる『経済学原理』にも散見されるのであるが、更に *Elements of Economics of Industry, being the first Volume of Elements of Economics*, Macmillan, London, 1916 (戸田正雄訳『マーシャル経済学入門』, 日本評論社。昭和25年)や大冊 *Trade and Industry*, London, 1919 においては、より一層詳しく知ることが出来る。特に労働組合に就いては『経済学原理』の方ではあまり触れられておらないが、*Elements of Economics* では特に一章を設けて、詳細な展開がなされており、マーシャルの該博な労働問題に関する知識をうかがわせるに足る。

本稿の目的は、これらの著書のなかに散見されるマーシャルの豊富な労働問題に関する観察をひろい上げ、それらがマーシャルの経済理論とどのようにからみ合っているかを分析しようとする。それによってマーシャルの労働市場に就いての見解を明らかにしたいと考える。このことによって、日本の労働市場論研究に若干でも貢献しうるならば、筆者は幸いである。

2. A. マーシャルの経済学の2源泉

先ず A. マーシャルの労働市場論を考察する前に、彼の経済学の特徴を把握することが必要とされる。

マーシャルは『経済学原理』の冒頭で経済学を次の如く定義しておく。

「経済学は日常生活を営んでいる人間に関する研究である。それは、個人的ならびに社会的な行動のうち、福祉の物質的要件の獲得とその使用にきわめて密接に関連している側面を取り扱うものなのである。」⁽⁴⁾

この定義は有名であるが、この定義においてマーシャルの真意をとらえることは容易でない。これはある意味ではマーシャルの全理論体系を把握した後において始めて理解しうるものであろう。マーシャルは更にこの定義に続けて、その意味を敷衍するような形で、次の如く述べている。

『経済学は一面においては富の研究であるが、他の、より重要な側面においては人間の研究の一部なのである。』⁽⁵⁾

この定義を読むと、マーシャルの経済学は2つの側面からなっていることが明らかとなる。すなわち一方では「富の研究」であるが、他方ではより重要な側面においては「人間の研究」である。ところで、この「人間の研究」とは如何なる意味においてであろうか？ マーシャルは更に上に述べた定義に続けて次の如く述べている。

「人間の性格は、宗教的信念の影響を除くと、他のどのような影響よりも日常の仕事とそれによって獲得される物質的収入によって形成されてきたところが多い……。」⁽⁶⁾

つまり、マーシャルにおける「人間の研究」とは、ここで見る限りでは人間の性格と、人間の行なうさまざまな営利的諸活動、そしてそれがもたらす

(4) A. Marshall, *Principles of Economics* (8th ed.; Macmillan, 1964), p. 1.

馬場啓之助訳。『マーシャル経済学原理』(東洋経済, 昭和40年) I, 3頁。

(5) A. Marshall, *op. cit.*, p. 1. 馬場訳『経済学原理』I, 3頁。

(6) *Ibid.* 馬場訳『経済学原理』I, 3頁。

所得との相互関連を考察することにあるといえるだろう。人間の性格と所得の大小との関連が最も明白にみられるのは貧困現象においてであり、マーシャルは上述の経済学の定義にすぐ続けて「貧困は品位の低下を起こす⁽⁷⁾」という見出しの下に、所得の大小がその人の性格におよぼす影響を詳細に敘述している。この点を更に詳細に考察してみたい。

このマーシャルのいう「人間の研究」が、マーシャルの全理論体系にどのように関連づけられるか、この点の分析において筆者が著しく啓発されたものとして、Talcott Parsons の論文⁽⁸⁾を挙げなければならぬ。T. パーソンズのマーシャル理解が正当か否かには疑問なきにしもあらずであるが、マーシャル理解のためには非常に良い鍵であることは否定し得ない。

T. パーソンズのマーシャル解釈は次の如くである。マーシャルの経済理論の一方は、富の研究に向けられている。この富の研究における基礎概念は「功用」であり「限界」であり、そして「代替」である。これらの概念がマーシャルの経済理論の各部分につらぬかれている。例えば「代替」概念によって、生産理論における実質生産費 *real cost of production* の概念が発展しており、また「限界」概念から限界生産力の概念が発展し、それによって彼の分配論が体系づけられている。そしてこれらが極大満足の理論 *Doctrine of Maximum Satisfaction* となって、国民所得論及び厚生経済学へと発展している⁽⁹⁾。ところでマーシャルの経済理論の他の一方は勿論「人間の研究」であるが、この人間の研究は、パーソンズに従えば「欲望と欲望満足との関連において見た、人間の品性と活動の漸進的な進歩の理論」に他ならない。そしてこの側面は一方の富の研究に関する側面と密接にからみ合っていて、両者は相互に切り離すことが出来ないし、この両理論のからみ合いの中にマーシャル経済理論の最大の特徴を見るべきであるというのがパーソンズの意見であ

(7) *Ibid.* 馬場訳『経済学原理』I, 3頁。

(8) Talcott Parsons, "Wants and Activities in Marshall," *Quarterly Journal of Economics*, XLVI (1931-32), pp. 101-40.

(9) T. Parsons, *op. cit.*, p. 103.

(10)
る。

従ってパーソンズによれば、マーシャルの人間研究の鍵は、「欲望と欲望満足」及びそれとの関連において見た「人間の品性と活動の漸進的な進歩」の中に存することになる。そこで我々は「欲望」*Wants* と「活動」*Activities* の関係をもっと詳細に考察してみる必要がある。

マーシャルは『経済学原理』第3篇「欲望とその満足」の序章において、従来需要理論が軽視されて来たこと、その理由として第1にはリカルドが生産費の面にあまりに重点を置きすぎ、需要面を軽視したこと、その他2つの理由を挙げて、最後に次の如く述べている。

『リカルドとその一派がいささか排他的に強調しすぎたきらいはあるが、あの偉大な真理、すなわち下級動物の場合には欲望こそ生活の規制者であるかもしれないが、人類の歴史を解く鍵を求めるには努力と活動の形態の変化をこそ注目しなくてはならないという真理を、ここで確認しておくことはいぜん大切なことなのである。』⁽¹¹⁾

つまり動物においては欲望が生活の支配者であるが、人間においてはそうではなく、人間の努力と活動とが人間の発展と向上とをもたらすものであり、欲望はそれに伴って生成して来るという意味で従位に立つものである。そこでマーシャルは第2章「活動との関連における欲望」において、欲望と活動との関係を、人類歴史の発展の中で捉え、始め食、次いで衣類、更には住居、そしてその上にさまざまな文化的な欲望が成立して行ったとしている。そして結論として

『おおざっぱに言えば、人間の発展の初期の段階ではその欲望が活動をひき起こしたのであるが、その後の進歩の一步ごとに、新しい欲望が新しい活動を起こすというより、むしろ新しい活動の展開が、新しい欲望を呼び起こしてきたとみてさしつかえないようである。』⁽¹²⁾

(10) T. Parsons, *op. cit.*, p. 102.

(11) A. Marshall, *op. cit.*, p. 72. 馬場訳『経済学原理』Ⅱ, 6頁。

(12) A. Marshall, *op. cit.*, p. 76. 馬場訳『経済学原理』Ⅱ, 11~12頁。

もし経済を単に欲望満足の機構とのみ考えるならば、活動というものは目的達成のための手段と考えられるにすぎず、活動が人類の歴史形成上において持つ重要な役割は見失なわれてしまうであろう。しかしマーシャルは活動を新しく見直すことから出発した。人類の欲望の発展段階を考察するに当たって、その発展を促す契機は他ならぬ活動であること、そして欲望と活動とは一方的にではなく、相互的に発展して行くものであることをマーシャルは強調したのである。従ってマーシャルにおいては欲望に関する科学は、これを規制するものが活動であるという意味において、これを努力と活動とに関する科学 (*The Science of Efforts and Activities*) から出発することが当然であった。欲望というものが、この活動という視角から見直されることによって、マーシャルの需要理論が成立し、また更にマーシャルの価値論もこれによって形成され、分配理論も著しい影響を受けるようになったのである。まことにパーソンズの述べているように『マーシャルは、価値論のためにも、欲望をば、その欲望の発生の歴史 *their genesis* を考察することなしに、最終的な与件としてとらえることを断呼として拒絶しているのである。⁽¹³⁾』

このような欲望及び活動のとらえ方から、マーシャル独特の概念であり、また我々の研究主題にも密接な関連を持つ2つの概念が生じて来る。すなわち「生活基準」*Standard of Life* と「安楽基準」*Standard of Comfort* とである。「生活基準」の向上とは「知性・活力及び自主性の向上を意味し、それに伴って支出の仕方がより綿密で思慮に富んだものとなり、食欲はみたすが体力を増進せしめないような飲食をさけ、肉体的にも道徳的にも不健全な生活をしりぞけるようになる」ことに他ならず、また「安楽基準」の上昇とは、「おそらくは低級な欲望が優勢な位置をしめていると思われるところの、人為的な欲望の単なる上昇といったほどの意味のものである。⁽¹⁴⁾」

この2つの概念にもとづいてマーシャルは欲望を3つに分類している。

(13) T. Parsons, *op. cit.*, p. 111.

(14) A. Marshall, *op. cit.*, p. 574. 馬場訳『経済学原理』Ⅳ, 249～250頁。

第1の範疇は単なる生物学的生存を維持するに必要な欲望であって、これは動物にも人間にも共通して存在しているものである。第2の範疇は「生活基準」を支え、これを形成するに役立つ諸活動に伴って生ずる欲望であり、これは労働の能率を高める役割を果すものである。第3の範疇は「安楽基準」の下で考えられるものであって、それは低級なそして労働能率には何らプラスをもたらさない欲望である。⁽¹⁵⁾

マーシャルは「安楽基準」の代りに「生活基準」が向上することによって、経済社会の進歩が実現すると信じたし、ここにおいて古典学派の理論を根本的に修正し得たと考えたのである。古典学派の悲観的な賃金の生存費説、またマルサスの人口法則、更にはリカードの労働価値説等々は、「安楽基準」の向上という変化によって修正を見るようになった。例えばマルサスの人口法則についてであるが、マーシャルはこれについては次のように修正している。マーシャルはマルサスの人口法則は基本的には有効だと考えている。そして人類の大部分の歴史については、文字通り、マルサスの理論が適用されうると考えた。「世界の大部分の国々では賃金は、ほほいわゆる賃金鉄則によって規制されて、その水準を、どちらかというとな非能率だといわなくてはならないような労働者を養育し、その生存を維持させるのが精一杯だ、というような高さにくぎ付けにしているようだ。」⁽¹⁶⁾

しかしマーシャルは、この賃金鉄則は、西ヨーロッパには適用されないと考えた。それは「生活基準」の向上にもとづく労働能率の上昇が始まっており、これが賃金水準の上昇をもたらし、これが人口の急速な増加を阻止しているからである。⁽¹⁷⁾

また労働の供給についてのマーシャルの理論も、古典派の如き生理学的必要からではなく、「生活基準」の概念から説明している。すなわち賃金の増

(15) A. Marshall, *op. cit.*, p. 440. 馬場訳『経済学原理』Ⅳ, 37頁。及び T. Parsons, *op. cit.*, p. 112.

(16) A. Marshall, *op. cit.*, p. 441. 馬場訳『経済学原理』Ⅳ, 39頁。

(17) A. Marshall, *op. cit.*, p. 575. 馬場訳『経済学原理』Ⅳ, 251頁。

加は労働の供給を増大させることは一般的に認められるが、例外もまた少ない。例えば南方土人の如く無智で遅鈍な人々は、賃金率の上昇に伴って反って労働供給を減少させる。これに反し精神的視野が広く性格が確固としてまた弾力的である人々は、賃金率が高いと労働供給を増加する。そしてかかる両者の間における労働供給の相違を、マーシャルは「生活基準」の相違によって説明する。すなわち生活基準の向上は新しい活動を生み、その新しい活動は新しい欲望をひきおこすのである。マーシャルは、快樂主義やまた本能的どん欲から労働供給を説明しようとするのではなく、反ってこの「生活基準」の概念で説明しようとするのである。

マーシャルの賃金論も、賃金生存費説の修正である。『経済学原理』第6篇「国民所得の分配」第2章「分配の予備的考察統論」の中で彼は次の如く述べている。

『このようないしは、需要と供給は賃金にたいして相関的な影響をおよぼすわけで、そのいずれか一方が支配的な力をもっているとはいえない。それはちょうど一丁のはさみのどちらの刃、ないしはアーチのどちらかの支柱がそういう力をもっていないのと同じようなことなのだ。賃金は労働の純生産物と均等になる傾きがあり、その限界生産性は需要価格を規制する。その反面、賃金は能率のたかいエネルギーを養成訓練し、かつこれを維持していく費用と間接的でありくんであるが、密接な関係をもっている。課題に関連あるいろいろな要素はたがいに規定しあっており、そのために供給価格と需要価格は均等になる傾きをもつことになる。賃金は需要価格ないしは供給価格のどちらか一方によって規制されるわけではなく、需要供給を規制するいろいろな原因の全系列によって規制をうけるのである。』⁽¹⁸⁾

換言すれば、賃金の需要価格を決定するその限界生産力は、「生活基準」の向上に伴って上昇するし、他方賃金の供給価格を決定するところの「養育し、訓練し、そして能率的労働のエネルギーを保持する費用」もまた生活基

(18) A. Marshall, *op. cit.*, p. 442. 馬場訳『経済学原理』Ⅳ, 41頁。

準の向上に伴って増大せざるを得ないからである。『また西欧諸国においては、熟練労働についていえば、一般に賃金が最高の企業で費用としてはかえって最低となっている事実がよく認められている。⁽¹⁹⁾』とマーシャルは述べているが、この逆説的な命題の中にこそ、マーシャルの賃金論のエッセンスがあるというべきであろう。

以上によって、マーシャルの経済理論は、一方においては富の研究であり、他方においては人間の研究であること、そしてこの人間の研究とは欲望と活動とに関連したものであることが明らかになった。この2つの側面がマーシャル理論のすみずみまで互いに滲透していることは、彼の『経済学原理』を注意深く読む読者には次第に明らかになって来るのであるが、その最も代表的な例は、第6篇「国民所得の分配について」の冒頭の文章であろう。

『この編の基調は、自由な人間が機械、あるいは奴隷と同じ原理によって働かされるものではないという事実のうちにある。もし働かされるものなら、価値の分配側面と交換側面とにほとんど差異がないことになる。……… [生活必需品をこえた] 余剰を人々のあいだに分配するしかたを規制している一般的な原因はどのようなものなのか。また慣行的な必需品、つまり安楽基準はその原因としてどのような役割をはたしているのか。消費や生活のやり方が生産能率におよぼす影響はどんな役割をはたしているのか。欲望と活動、つまり生活基準の役割はどのようなものなのか。代替の原理の多面的なはたらき、いろいろな階級と職階の肉体労働者ならびに頭脳労働者のあいだの生存競争はどのようなかたちをとっているのか。その努力の報酬を獲得するとたちまち費消してしまう人々に比べて、努力すると共に「待忍する」人々は、この全般的な所得のながれのどのような分け前にあずかるのか。これらいろいろな問ならびにこれに類した問にたいして大筋の解答を与

(19) A. Marshall, *op. cit.*, p. 441. 馬場訳『経済学原理』Ⅳ, 40頁。

えてみることにしよう。⁽²⁰⁾』

この文章の中には、マーシャル経済学の2つの側面が、実に生き生きと描かれていることがわかる。一方では「代替の原則」であり、「資本蓄積に伴う利子」でありまた「利潤」であるが、他方では「生活基準」であり、また「安楽基準」、更にはそれに伴って生ずる「需要理論」である。

この例は分配理論についてであるが、我々の問題にする労働市場論についてもやはり同一のことがいえると考える。ただ労働市場論には、他の商品市場にはみられない特殊性が若干存在しており、この特殊性によって労働市場の特異性が展開されているのである。これは第6篇「国民所得の分配」の第3章から第5章に展開されている。隅谷教授が指摘したのはこの点である。

従ってマーシャルの労働市場論の性格を把握しようとする試みは、今まで述べて来たマーシャル経済学の2つの源泉から先づ分析が開始されるべきであり、この2つを分析道具として考えねばならぬ。そして更にその上に、労働の特殊性として彼によって指摘された点を考慮しながら分析を進めることが要請される。『経済学原理』第6篇の第3章から第5章にかけて展開されている労働の特殊性のみに限定してそこからマーシャルの労働市場論の特殊性をつかまえようとすることは、マーシャルの理論の基本的性格を見失う恐れがあるといべきであろう。マーシャルの労働市場論が、労働経済学の発展に如何なる点で寄与したかを考える際、むしろ労働の特殊性を強調したことにあるよりは、むしろ「生活基準」の意義を発見したことにより大きな比重をおくべきではないであろうか？

3. マーシャル労働市場論の2つの視角

マーシャルの経済理論は、2つの異った流れの組合せであるということは、マーシャルの労働市場に就いての分析にも勿論妥当する。ここではマー

(20) A. Marshall, *op. cit.*, p. 418. 馬場訳『経済学原理』Ⅳ, 3~4頁。

シャルの労働市場論をこの角度からとり上げてみよう。

前述した如く、「富の研究」がマーシャルの経済学の一側面であったとすれば、この研究において貫かれた諸原理は、労働市場の場合どのように適用されているであろうか？ この場合の諸原理は、勿論限界生産力説でありまた代替補完の原理である。

例えば労働を単に生産要素としてみた場合には、そこには勿論これらの諸原理が貫かれることはいうまでもない。そしてマーシャルがこれらの原理に基づいて労働市場を解釈している例は少ない。『経済学原理』第6篇「国民所得の分配」においては代替原理が分配を規制する原理として登場して来る。資本と労働との間における代替・競争関係については同篇の第2章において述べており、⁽²¹⁾ また異質な労働者間の競争も第7章「資本の利潤と企業能力」においてこの代用原理によって説明している。⁽²²⁾ また賃金についてもマーシャルは、一応の留保条件つきではあるが、限界生産力説をとっている。『脚注に示しておいた諸条件に制約されるけれども、そのことは当面の主要な目的からいえばそう重要なことではないのだが、とにかくすべての種類の労働の賃金はその種類の限界的労働者の追加的労働によってもたらされる純生産額と均等となる傾きがあるわけである。⁽²³⁾』勿論マーシャルは限界生産力説が賃金のすべてを説明するとは全く考えておらず、極く一部分を説明するのみであると考えていたことは、その次に続く文章が示している。⁽²⁴⁾ マーシャルが持っていた限界生産力説に対する批判は、ここで詳細にふれることは出来ないが、しかしマーシャルの分配理論が基本においては限界生産力説にもとづいていたことは明らかであり、特にスティグラの指摘する如く、彼は『経

(21) A. Marshall, *op. cit.*, p. 449. 馬場訳『経済学原理』Ⅳ, 52頁。

(22) A. Marshall, *op. cit.*, pp. 497-500. 馬場訳『経済学原理』Ⅳ, 128~132頁。

(23) A. Marshall, *op. cit.*, p. 429. 馬場訳『経済学原理』Ⅳ, 20頁。

(24) A. Marshall, *op. cit.*, p. 429. 馬場訳『経済学原理』Ⅳ, 20頁。『この提説が賃金の理論となっているという主張にたいしては、このように反対しなくてはならないが、これが賃金を規制する原因のひとつのはたらきを解明しているとの主張にたいしては、べつに反対する理由はなにもない。』

『経済学原理』の版を重ねる度毎に限界生産力説に近づいて行った。⁽²⁵⁾労働組合の賃上げ効果を、マーシャルは *Elements of Economics of Industry* で論じているが、その扱いは『経済学原理』第4篇第6章「結合および複合需要、結合および複合供給」における諸財の結合需要 joint demand と派生需要 derived demand の場合と同一である。⁽²⁶⁾労働組合の賃上げ効果は、財において「直接使用のためでなく、ある貨物生産の際の一生産要素として用いられる場合、もしその生産要素の供給が阻害されたために、その貨物の価格が著るしく高まるに到る条件如何」を考察するのと同じことなのである。マーシャルはその賃上げを成功させる条件を4つ挙げているが、それらの条件は彼の「富の理論」において用いられておる原理、すなわち「代用原理」、「需要弾力性」、「結合需要」、「生産費の理論」の応用である。⁽²⁷⁾

マーシャルは労働組合の賃上げの効果を過大視することを極力戒めていることは、彼の『経済学入門』の第14章「労働組合」のいたるところで見られるが、そのことは明らかに彼の「富の理論」から由来するものといえるだろう。次の文章は明白にマーシャルの見解を示している。

「直接的手段を以て、一般労賃をたかめるの労働組合の力は、けっして多大なるものではない。およそ当時の一般的経済勢力の趨向が労賃騰起に反するものなるときは、労働組合の力たるや決して、よくこれとたたかい得るものでない。」⁽²⁸⁾

マーシャルは、労働供給の制限による賃金引上げが不可なる所以を、第13章「労働組合」で詳細に述べているが、その要点は2つあり、第1は労働制限に伴って国民分配分も当然減少し、その帰結は労働雇用機会の一層の減少

(25) A. Marshall, *op. cit.*, pp. 444-445. 馬場訳『経済学原理』45~46頁。
George J. Stigler, *Production and Distribution Theories*, (Macmillan, 1946), p. 356.

(26) A. Marshall, *op. cit.*, pp. 316-318. 馬場訳『経済学原理』Ⅲ, 77~81頁。
なお、ここでは建築業の争議を例にあげて具体的に説明をしている。

(27) A. Marshall, *Elements of Economics of Industry*, p. 366. 戸田訳『経済学入門』447頁。

(28) A. Marshall, *op. cit.*, p. 396. 戸田訳『経済学入門』485~486頁。

をひきおこす、第2は生産高の制限は、資本の供給を阻害することになる。その結果資本の海外逃避が生ずることになり、それは国際競争力の低下をもたらすことになる。⁽²⁹⁾ かくの如くマーシャルの労働組合論は、「富の理論」から見る限り可成り手厳しい批判を含んでいるものであるが、同時に彼の労働組合論は彼の「生活基準」の理論からも眺められる訳で、この点において彼の組合に対する評価は積極化するといえるであろう。

かくの如く「富の研究」の方法論がマーシャルの労働市場論に貫かれているが、他方「人間の研究」の部面における方法論もそれに劣らぬ比重をもって守られているのである。こんどはこの問題を分析してみたい。

「人間の研究」の意味するものが、マーシャルにあっては「欲望と活動」との発展であり、それに伴う人間の経済的および倫理的諸能力と素質の向上であったことはすでに述べた。マーシャルにあっては労働市場もそのような視角から眺められるのは当然であった。例えば労働供給に経済的原因が作用すると考える時においても、これは生理的なものや快楽的なものでもなく、少くも西ヨーロッパにおいては生活基準の向上に基くものであり、それはまた性格と欲望とが活動によって発展せしめられたことによるものである。また労働能率も当然のことながら、「生活基準」が如何にあるかによって著しい差異が生じて来ることになる。単なる「安楽基準」の向上のみでは、「人々はまえよりみじめな状態になり」また「労働の供給でも制限しなければ、賃金をあげる手段はないことになろう」と彼は⁽³⁰⁾いっている。マーシャルが高賃金高能率思想を抱くようになったのは、やはりアメリカにおける経済学の影響⁽³¹⁾であろう。

(29) A. Marshall, *op. cit.*, pp. 357-359. 戸田訳『経済学入門』435~437頁。

(30) A. Marshall, *Principles of Economics*, p. 575. 戸田訳『経済学原理』Ⅳ, 250頁。

(31) 「高い賃金がそれを受けとる人々だけでなく、その子孫たちにとっても能率を向上させるという、よい効果をおよぼすことに関して、周到な研究が行なわれるようになったのは、わずかに一世代前からのことである。この種の研究において先駆的な役割をはたしたのは、ウォーカーをはじめアメリカの経済学者達であった。」 A. Marshall, *op. cit.*, p. 423. 馬場訳『経済学原理』Ⅳ, 9頁。

更にマーシャルにとって「欲望と活動」とが、労働者階級にとって重大な意義をもつのは、その効果が累積的だからである。この累積的であることが、マーシャルにとっては非常に大きな意味を持つことになる。次の文章などは、マーシャルの真意をよく伝えている。

『もしある時点で個人ないし階級の賃金が抑圧をうけると、その直接の悪い効果は目につきやすいが、それから起こるほんとうの苦難は、むしろその間接の結果の中に潜んでいる。直接起こった悪い効果といっしょに消えていくような苦難であれば、一般には、労働者の性格を低下させ、それが強靱なものとなるのを抑止するところの間接の結果と比べてみて、そう重要なものではないといえよう。労働者の性格がひとたび弱められると、さらに一層の性格の弱化と苦難がつづき、それがまた、さらに一層の弱化と苦難を呼び起こす、といった過程が累積されていく。他方、高い稼得と強靱な性格は一層の性格の強化と高い稼得をもたらす、それがまたさらに一層の強化と高稼得を呼び起こす、といった累積過程がつづいていくわけである。』⁽³²⁾

ところでマーシャルが『経済学原理』第6篇「国民所得の分配」の第3章から第5章にかけて労働の特殊性を5点あげ、その詳細な説明を加えているが、この労働の特殊性とまた「生活基準」の概念とは如何なる関係にあるであろうか？ 彼のこの5点を要約すると次の如くである。⁽³³⁾

1. 労働者は労働力は売るが自分自身を売り渡すわけではない。その結果労働者に対する人的資本の投下はその両親の資力や先見および無私の心の有無によって制約される。この制約のもたらず弊害は社会の上層では比較的少ないが、社会の下層ではこの弊害は大きい。しかもその弊害は累積的である。
2. 労働力の販売者は自分でそれを仕事場までとどけなくてはならない。これから起こる結果は一般には累積的でなく、その点の重要さが非常に大で

(32) A. Marshall, *op. cit.*, p. 466. 馬場訳『経済学原理』Ⅳ, 78頁。

(33) A. Marshall, *op. cit.*, pp. 466-477, 馬場訳『経済学原理』Ⅳ, 79~97頁。

あることはきわめてまれである。

3. 労働力は保存がきかない。
4. 労働力の販売者は交渉力が弱い、そしてこの交渉上の不利さは最低の職階の労働者においていちばん甚だしい。そしてこの効果は累積的である。
5. 特化した能力をもった労働の追加供給をするのにたいへん長い時間がかかる。労働の供給に関して「長期」は一般に、非常に長期にとらなくてはならない。

第1の特殊性は明らかに「生活基準」というものに密接な関係を持つ。つまり親なり雇主の「生活基準」が次代の労働者の「生活基準」をきめる重要な要素になる訳である。第2の特殊性は「生活基準」にはあまり関係はなく、むしろ「労働移動」の摩擦性の問題に関係がある。第3と第4の特殊性は「生活基準」に著しい関係がある。労働者は第3、第4の特殊性のために取引者として不利であり、それは特に不熟練下層労働者において一層不利に作用する。他方この取引力の薄弱さに基づく低賃金は、第1の特殊性を通じ、労働者の「生活基準」を低下させ、そのため「労働者としてのかれの能率を低下させ、それによってかれの労働の正常価値を低落させることになる。⁽³⁴⁾」第5の特殊性は労働供給の時間に関するものであって、必ずしも労働のみの特殊性とはいえないし、時間の長短は他の生産要素にも存する訳である。これは「生活基準」とは直接的関係はないといえるだろう。

以上の如く労働の特殊性と「生活基準」とはマーシャルにあっては密接な関係があることが分った。概していえば労働の特殊性は労働者の生活基準に対して不利に作用し、特にこのことは下層労働者階級に妥当し、上層の熟練労働者階級には比較的その弊害を免れているということになる。

ところで、ここに労働者階級が自主的に、これらの不利を免れるためにつくった労働組合の機能が問題となるし、マーシャルもこれを取りあげてい

(34) A. Marshall, *op. cit.*, p. 473. 馬場訳『経済学原理』Ⅳ, 91頁。

る。

マーシャルは労働組合を単に代替原理によって見るだけでなく、「生活基準」からも考えていることは次の文章によっても明らかである。「労働組合を審判するにはおもに、その労働者の性格に及ぼす影響によって、審判すべきである。」⁽³⁵⁾と述べている。これは特異な、しかしながら如何にもマーシャルらしい労働組合の解釈である。ここでマーシャルは労働者階級のエートスに及ぼす効果を考えているのである。

「労働組合が高賃金を維持することを可能ならしめるのは、組合が労働者の人格に及ぼす影響力が大きいことに主として由来する。……最早労働者階級の肉体的並びに道徳的水準を低下せしめる欠乏とか空腹の恐怖はなくなった。労働組合はこのたえざる生活基準の上昇の結果であると共にその主な原因でもある。生活基準の高い所、労働組合も当然ながら発展した。労働組合の強い所、生活基準は一般に上昇した。」⁽³⁶⁾

労働組合の機能は従って、マーシャルにおいては一方「富の理論」から他方は「生活基準」の理論から理解されねばならぬ。労働組合は「生活基準」の視角からすれば、労働者の欲望と活動とを正しく発展させ、その能率を高め、国民分配分の増大に積極的に貢献するように努力しなければならない。単なる「安楽水準」の増大や、労働の人為的制限は決して労働組合の本来の目的を達成せしめるものではない。

ここのようなマーシャルの態度がはっきりと見られるのは次の例においてである。マーシャルは『経済学入門』の第14章「労働組合」において、「労働組合が永久に一般的労賃を高めるべき条件」は何であるかを分析し、5箇条を挙げている。⁽³⁷⁾それを要約すると次の如くである。

1. 労働組合は営業を容易かつ確実にするようにせねばならぬ。

(35) A. Marshall, *Elements of Economics of Industry*, p. 388. 戸田訳『経済学入門』476頁。

(36) A. Marshall, *op. cit.*, p. 388. 戸田訳『経済学入門』476頁。

(37) A. Marshall, *op. cit.*, pp. 396-398. 戸田訳『経済学入門』486頁。

2. 労働組合は、謹厳・正直・独立・自尊の習性を養成し、以て現在ならびに次代の労働者の間における生活基準を高めるよう力むべきである。
3. 労働組合員はできる限り多くの後進をたすけて産業的技能を得しめ、高級取りの労働に加入せしめるよう力むべきである。このことは多少の自己犠牲を必要とするものであり、従ってこのことは、熟練職業への加入をわざと困難にし、その労賃を頗る高く釣上げようとの試みとは相容れないものである。
4. 労働組合は力めて、労働階級の中に眠れる多大の事業力と発明の才とを啓発し、以て生産を経済的にし国民配当を増大せしめるようにすべきである。
5. 労働組合員は常に、労働者の一階級が直接他の階級へ損害を蒙らしめるような行動をば、避けるよう心せねばならぬ。同一の雇用分野を相争う労働組合の間のたたかい、たとえば船大工の組合と大工のそれ、または鉛管師の組合と据付工のそれとの間におけるが如き、充分の注意に価するのである。けれども実はさらに重要なことは、一の職業が他の職業の用うべき原料の産出をきりつめ、又は他の職業の人々をその閑せざる罷業にて失職せしめる、といったような事をなし、以て一が他へ害を加える如きことである。

以上の如きマーシャルの提言は、マーシャルの労働経済理論から自から出て来るものである。1の「営業を確実にする」は明らかに彼の「富の理論」からであり、国民分配分の増大という目標からである。2の労働組合の倫理的課題は、文面にある通り「生活基準」の理論からである。3の技能の向上は一方は「富の理論」からであるが(国民分配分の増大)、他方は「生活基準」理論からである(高賃金に基づく生活基準の向上)。4の事業力と発明の才の啓発は明らかに「富の理論」からであり、5の組合間の縄張り争いへの戒めも「富の理論」から来るものである。

4. 結 論

A. マーシャルの労働経済学の潮流は、ひきつづきイギリスの労働経済学の伝統となったと考えることが出来るであろう。ウェッブの『産業民主主義』における労働組合論には、マーシャルの影響が濃厚である。例えばウェッブが労働組合の生産性向上の機能を強調していることや、また保守的な熟練工労働組合に見られる徒弟数の厳重な制限に対して非難を向けていることなどによって明らかである。⁽³⁸⁾ 総じてイギリスの社会主義——特にフェビアン社会主義——は創立以来マーシャルの経済学の影響を強く受けて来たといつて差支えないであろう。

ところでこのマーシャルの労働経済論の評価が問題となる。ここでは問題は2つに分けられるように考えられる。1つはマーシャル労働経済学の時代性であり、2つにはマーシャル理論の現代的意義である。始めにこの前者の問題をしばらく考察して見たい。

A. マーシャルの経済学とその主要骨格は、大体1870年代に形成されたといわれている。当時はイギリス資本主義の爛熟期であり、海外からの利潤流入は莫大なものになっていた。労働者階級は1840年代の苦難を経て漸く階級としても大きく成長して、その労働組合活動も確固とした基盤を持つようになった。しかしながら1870年代はまだ熟練工を中心とした時代であつて、一方古い手工業的熟練が崩壊しつつも、他方生産財生産のための熟練労働者がより多く需要された時代でもあつた。

また1870年代はイギリス産業構造の変動が著しかった時代である。1870年前後イギリスはこの点で大きな変革を経験したのであつたが、それは農業の衰退ということである。雇用と所得の源泉としての農業の比重は急激に減退した。この点についてはW. コートは次の如く述べている。

(38) S. & B. Webb, *Industrial Democracy* (11th ed.; London: 1913), pp. 705-711. このウェッブの大著はマーシャルを非常に引用している。例えば p. 652, p. 722. 等。

「1851年には成人々口の1/4が農業労働者であったが、1911年になると1/20以下に減じ、有業人口の中、農業に従事するものは、今や全体の8%にすぎなかった。そして、その時までには農業労働者よりも炭坑夫の方が多くなって来た。かくて石炭輸出のおかげで年々の輸入食糧品の代金を支払うことができたのである。⁽³⁹⁾」

所得構成の産業別構成比でみる限り、1870年代のイギリスは大体第1次産業は20%であって、1955年当時の日本にほぼ同一であるといえるだろう。⁽⁴⁰⁾従って、農業の比重の急激な低下、産業構造の高度化、莫大な海外利潤の流入、労働組合主義の抬頭等が1870年代イギリス資本主義の特徴を形成していたといえる。「進歩は労働大衆の状態を急速に向上しつつある。」とマーシャルが断言することが出来た時代であった。⁽⁴¹⁾マーシャル流の倫理的な労使協調論が成立しうるような経済的地盤がそこにあったといわなければならぬ。労働組合運動も70年代は、いわば少年期から青年期へと成長発展する時期であったといえよう。農業の比重の減少に伴って、農村から工業地帯に流入する若年労働力の量は、今日の日本のそれに劣らぬものがあったであろうと推察される。これらの労働者は階級としてもまた技能面からも未発達の段階にあったと考えられるし、彼等は恐らく低能率低所得の悪循環過程をたどっていたであろう。また他方ではかかる若年労働層とは対照的な熟練労働者階級も、当時においては可成り数多く存在していたし、彼等こそは70年代のイギリス資本主義を支える最大の担い手であったといえよう。マーシャルの「生活基準」論は、従ってかかる未熟練労働者のエートスを熟練労働者のそれにまで高める所にねらいがあったとも考えることが出来る。

マーシャルの労働経済論の背後にある彼の社会哲学的背景にふれておくことも無駄ではあるまい。それは自由競争秩序に対する揺ぎなき信頼と人類の

(39) W. コート『イギリス近代経済史』矢口孝次郎監修 243頁。

(40) 篠原三代平『産業構造』(春秋社, 昭和34年), 12頁。

(41) A. Marshall, *Elements of Economics of Industry*. 戸田訳『経済学入門』420頁。

合理性の増大への期待である。マーシャルが自由競争秩序に信頼を寄せたのは、いわゆる「経済人」によって表わされるような利己心を是認しているからではない。マーシャルはかかる利己心をば否認しており、人間の経済的動機⁽⁴²⁾としては「家族に対する配慮」とか「社会への奉仕」等をあげている。彼は無制限な経済的自由の下に如何に多くの弊害が生れたかをよく知っていたし、とくに労働階級に如何なる影響を与えたかについては彼自身よく知っていた。しかも彼は自由企業の断呼とした擁護者であった。次の文章がマーシャルの立場をよく明らかにしている。

「そもそも経済的自由の制度なるものは、いやしくも身心の相当に健全なる人々にとっては、精神的見地よりするも、物的見地よりするも、おそらく最良なるものであろう。然るにかの下層民 (*Residuum*) たちは、この制度をよく利用することが出来ない。⁽⁴³⁾」

マーシャルは、自由競争下において行なわれる事業活動こそは、人間の性格の最も高貴と考えられる部分——勤勉、節約、貯蓄、敢為性、細心等——を養成する重要な機会であると見なしていたし、その際の目標である富の増大⁽⁴⁴⁾は、事業活動の主な産物ではなくて副産物にすぎなかった。

マーシャルの更にもう1つの社会哲学的確信は、人類の合理性の進歩である。既成の慣習や伝統を打破って新しいより高い経済秩序を形成して行くこと、このことは一面では新しい欲望と新しい活動とを促すことによってマーシャルのいう「社会進歩」が実現されることを意味すると共に、他面では経済行動のすべてが自由競争の価格メカニズムの下、綿密細心の計算に基づいて決定されることを意味する。このことをパーソンズは、マーシャルの合理性⁽⁴⁵⁾は代用の原理の実現に他ならないといっているのは、適正な言であらう。

(42) T. Parsons, *op. cit.*, p. 135.

(43) A. Marshall, *Elements of Economics of Industry*, p. 406. 戸田訳『経済学入門』498頁。

(44) T. Parsons, *op. cit.*, p. 115.

(45) T. Parsons, *op. cit.*, p. 129-130.

次の問題はマーシャルの労働経済論の現代的意義である。マーシャルの理論の中で何が現代に生かさるべきかが問われる訳である。筆者にとってはマーシャルが一方「富の理論」他方「人間の研究」とこの2つの理論を巧みに結び合せたその結び合せ方がやはり最も我々が学ぶべき点ではないかと考えられる。「富の理論」も「人間の研究」も共に各資本主義国の歴史的発展の相違、また民族性や社会思潮の相違があつて、それぞれに異なるものがあるだろうが、しかしそれにもかかわらず、企業における自由競争が実現され、また同時に合理性という思潮が人間経済生活のすみずみまで滲透するにつれて、この両者の理論はいよいよ重要な分析上の武器となるであろう。しかもマーシャルにおいて「富の理論」と「生活基準論」とは共に一つに織り合わされて「有機的成長」という概念に結実して行く。社会進歩がこれによって実現されることになる。自由企業を擁護しながら、他方古典派の考える「自由放任」を修正し、もつて社会主義者達の攻撃に対して答えることが出来た。

またマーシャルの労働市場論の現代的意義について考える時、もう1つの点は彼の「生活基準」の理論のもつ意味であろう。マーシャルの生活基準という概念は、筆者の考え方では、今日の社会政策論争でいわれる「労働者」と「労働力」という2つの概念をとり結ぶ概念であると考えられる。労働者のエートス・労働者の生活水準・労働の生活様式等をひっくり返してマーシャルが考えたのが「生活基準」だと考えるが、これを媒介として労働者と労働力とは結ばれる。労働者のエートスは労働能率を規定し、それは賃金を規定する。賃金は逆に労働者の生活水準を規定することによって、労働者そのものを規定する。勿論マーシャルは「生活基準」に倫理的規範的意味を持たした点の特徴的であるし、そこにこそマーシャルの多元的な世界観が反映しているものであろうが、筆者には、「労働者」と「労働力」との対立矛盾の問題をマーシャルは「生活基準」概念によって解決したように考えられるし、これはやはり社会政策学研究者にとっては、暗示的なことではないかと考える。